

目的と方法 大島紬は、泥染による独特の色合い、精巧な緋構成、そしてしゃきつとした手触り等で、日本人に好まれてきた織物の一つである。東南アジア、中国、日本の織物を研究している中で、大島紬は、他の南日本の緋に比べて特異な存在であると感じた。何故そうであるのかを、奄美および沖縄の現地調査、中国の実物資料および文献との比較により検討し、染織品発生の一要因を考えてみようとするものである。

結果 大島紬は南日本の緋の中で、文様の面で趣きを異にする。久米島紬等、絹緋もあるが、それらとて他の緋と同様の文様構成であり、大島紬の文様とは異なる。こうした面からみても大島紬の特異性は、素材の違いによるものではなく、東南アジア、中国の影響の違いによるものではないかと考える。7世紀後半、新羅との関係が悪化していた大和朝廷は、「南路」と「南島路」を航路としたが、奄美を通る南島路は特に遣唐船等に多く用いられた。こうして「道の島」とも呼ばれた奄美には、当然中国文化の影響が色濃くあった。昭和39年、徳之島で古代綾錦の布が発見されたのをはじめ、「浮き織り」と称する綾織として現在までつながっている。大島紬が緋として織られるようになったのは、薩摩藩の貢納品として島民から徴収するようになってからである。紬や緋が一般に庶民のものとして発生したのに対し、大島紬は当初から藩財政の確保や親交のために、強制的に高級品向けに織られた。そしてその手本としたのが中国の錦織であった。大島紬の文様には、極度に抽象化し、四方連続に展開する中国文様の代表的な方法が随所に見られる。他の緋が南方的であるのに対し、寧波を過じての華東文化の影響が色濃く現われている。